

# 純粹理性批判 解説

## Vol.1

- 001 経験なしでは何も始まらない
- 002 認識は合成されたものである
- 003 アプリオリとアポステリオリ
- 004 いわゆるアプリオリな認識
- 005 アプリオリな認識と純粹な認識



# はじめに

- 解説者は哲学に関しては門外漢である。  
したがって、解説の内容に関しては保証できないm(\_\_)m
- あくまでこの解説は解説者の遊びの一環である。  
したがって、投稿頻度はすごい気まぐれ。
- 質問などは適宜コメント欄を使ってほしい→たぶん答えるかもしれない(?)



# 解説の大枠について

- 解説の底本として、  
「中山元(2010) 純粹理性批判 1 光文社古典新訳文庫」  
を用いる。  
→ すごくわかりやすい訳だからオススメ



# 解説の大枠について

以下の001…と続く番号は中山さんが独自につけてくださったもの  
このタイトルを基準に解説していく

→タイトルだけ見て内容浮かぶのが理想

今回は以下の5章分

- 001 経験なしでは何も始まらない
- 002 認識は合成されたものである
- 003 アプリアリとアポステリアリ
- 004 いわゆるアプリアリな認識
- 005 アプリアリな認識と純粹な認識



# 001 経験なしでは何も始まらない

- ・ カントが生まれる前にイギリス経験論という思想に勢いがあった
- ・ イギリス経験論的に言えば「経験のみから認識が始まる」
- ・ カントは一応「時間的に見て、経験に役立つものは何もない」と批判的に受け入れる。



# 002 認識は合成されたものである

「わたしたちの全ての認識が経験とともに始まるとしても、すべての認識が経験から生まれるわけではない。」



経験以外にも何か必要



# 002 認識は合成されたものである

認識は二つの構成物でできている。

一つ目が感覚的な印象で受け取ったもの（経験）  
二つ目が人間固有の認識能力(知性が持つ能力)が生み出すもの。

知性は、対象の像を比較したり、結び付けたり、分離したりして認識を作ることができる。

※知性は悟性と書かれてたりする。この解説では「知性」を使っていく



# 003 アプリオリとアポステリオリ

アプリオリ→「経験に先立って」

アポステリオリ→「経験の後で可能」

カントは「アプリオリな認識」が存在するかどうかを問いたい。

形而上学の基礎付けに繋がってく。



# 004 いわゆるアприオリな認識

ノーマン・ケンプ・スミス氏によると、カントはアприオリな認識を大きく三つに分けている。(中山さん訳の純理 解説p280)

- ①相対的にアприオリな認識
- 絶対的にアприオリな認識
  - ②純粹にアприオリな認識
  - ③純粹ではないアприオリな認識



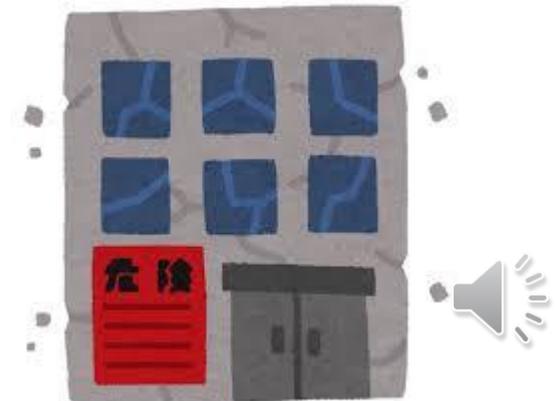
# 004 いわゆるアプリアリな認識

## ①相対的にアプリアリな認識

経験から借用された一般的な規則に基づいていると考えられる認識

(例)

ある人が家の土台を切り崩そうとするとき、ほかの人々は家が倒れることをアプリアリに認識できたはずだと批判する。



# 005 アプリオリな認識と純粹な認識

絶對的にアプリオリな認識

純理では、アプリオリな認識を個々の経験から独立したという意味ではなく、全ての経験から絶對的に独立した認識として扱う。

②純粹にアプリオリな認識

経験的なものが全く混ざっていない認識 ← ホントにあるのか気になってる  
カント (003を参照)



# 005 アプリオリな認識と純粹な認識

## ③純粹ではないアプリオリな認識

經驗的なものが混ざっている認識

(例) 全ての变化にはその原因がある→变化という概念が、經驗からしか引き出せないものであるから



# 余談

1007章まで続くので、普通に最後まで解説しきる自信が極限に低い。まだまだ内容は簡単。これから難関な章もてんこ盛り

純理が長すぎる件について

読み切るのと、解説できるのは違う

